

## 不安感とジェネラティビティ意識のジェンダーと 世代による格差に関する量的研究

### A Quantitative Study of Gender and Generational Disparities in Anxiety and Generativity Awareness

伊佐田 百合子 井垣 伸子 ジュンコ・グッドイヤー 竹村 睦  
Yuriko Isada, Nobuko Igaki, Junko Goodyear, Mutsumi Takemura

This paper describes the results of a questionnaire-based analysis of anxiety and generativity awareness in Japan. Following a large social environmental change, such as a deadlock of capitalist economy and rapid changes in the working environment under COVID-19 crisis, many Japanese are currently feeling anxious about their lives. To analyze how interest in the next generation is changing amidst increasing uncertainty about the future, and to also analyse the relationship between anxiety and generativity awareness, we conducted an Internet-based survey of 1036 adults aged 35 and older. The results show that the group that is not anxious about the next generation but is anxious about their own future has a low level of generativity awareness. Changes in anxiety by age group show that the young generation was highly anxious about their own generation but this decreased with age. In contrast, anxiety about the next generation increased with age. The results show that there was a switching phenomenon between anxiety and generativity awareness by increasing generativity awareness with the advance of age.

キーワード：エリクソンの漸成的発達理論、ジェネラティビティ、不安感、  
めざめポイント、黄金の10年

**Key Words** : The Epigenetic Chart in Erikson's Theory, Generativity, Anxiety, Awake Point, Golden Decade

#### 1. はじめに

地球規模で動くグローバル経済の裏には、南北格差があり、だれもが経済効率優先の資本主義の矛盾やいきづまり感を日常的に感じている。また、地球温暖化や海洋プラスチックゴミ問題など、地球環境への不安が高まってきている。さらに、2020年春からの新型コロナウイルスによる世界的パンデミックにより、経済活動が抑えられ、リモートワークなどが導入されたことによっ

て、労働環境が急激に変化しつつある。AI技術の急激な進歩により、失われる職業が顕在化するだけではなく、労働の形態そのものが変化しつつある。機械ができることは機械にやってもらい、そこで人間は一体なにをやらねばよいのかという本質的な問いに向き合わざるをえない状況におかれている。日本国内では、人工ピラミッドのバランスが大きくくずれ、少子高齢化問題による、労働力不足や年金についての不安も大きくなってきて

いる。このような時代の変革期において、人々の不安感が高まると同時に、人類全体として、地球規模で、次世代に何を残していくべきかという本質的な問題に多くの人の意識が向き合おうとしているように思える。

Eriksonのアイデンティティという概念が、1950年からこれまで注目されてきたのは、戦後、ファシズムが崩壊し、個の自由と確立が求められてきたためだと言われている(岡本ら(2018))。戦後の経済成長が終わり、バブルが崩壊した後の、失われた20年とも30年とも言われる経済低迷期を経た今、同じくEriksonの提唱によるもうひとつの概念、ジェネラティビティ(世代継承性)が注目をあびる時代が始まっているのではないか。2019年には、財務省の発行するファイナンスの巻頭言タイトルに、ジェネラティビティが登場している(グッドイヤー(2019))。本論文では、現在ふくれあがっている不安感と、自己確立の先にあるジェネラティビティ意識の高まり、というこの時代の2つの要因に焦点をあてて、その現状とそれらの関係について分析する。

Erikson(1950)は、ジェネラティビティという概念を中年期における心理社会的適応をもたらすものとして提唱したが、後に、Erikson自身も、また他の研究においても、中年期・高年期に通じるものとして捉え直している(Erikson(1982)、小澤(2013)、高橋(2020))。さらに、Schoklitsch & Baumann(2012)では、世代継承性の様相が年齢と関連している点が指摘されている。Stewart & Vandewater(1998)では、成人初期から、成人中期、成人後期にいたる世代継承性の道筋が議論されている。Stewart & Vandewater(1998)やMcAdamsら(1993)による研究では、世代継承的コミットメント指標は、中年期と高年期では高く、若年期では低いことを指摘しており、田淵(2009)も、30歳代以下や40歳代よりも、50歳以上の方が環境への関心が高いことを示している。一

方で、青年期における次世代継承に関する研究もある(Yamada(2004))。これらの背景から、本論文でも、アンケート対象を中高年にかぎらず、35歳以上と、比較的広く設定した。

本論文の構成は下記のようになっている。まず、セクション2で、調査の対象と方法、調査内容について述べる。セクション3では、ジェネラティビティを構成する因子について検討をおこなう。また、その下位尺度を使ったジェネラティビティ意識の分析をおこなう。次のセクション4では、不安感を取り上げ、ジェネラティビティ意識との関連を性別で、セクション5では年齢別にみていく。セクション6で、年齢を3つのゾーンに分けて不安感とジェネラティビティの関係を分析する。最後のセクションで、まとめと今後の課題について述べる。

## 2. 調査概要

今回のアンケート調査は、下記に示したようなインターネットを用いたオンライン調査として実施した。

調査対象者	35歳以上の一般成人1036名(男性518名、女性518名、平均年齢56.97歳、標準偏差13.125、年齢範囲35~86歳)
調査期間	2020年3月27日(金)~3月29日(日)
調査委託先	株式会社マクロミル
調査尺度	本研究で実施したアンケート調査の設問項目は、基本属性、ジェネラティビティ尺度、不安感の3つである。

基本属性については、性別、年齢、都道府県、地域、世帯年収、個人年収、職業、家族構成、最終学歴、交流状況について尋ねた。ジェネラティビティは、Eriksonの心理社会発達の達成で測られることが多いが、串崎(2005)のジェネラティビティ尺度は、Erikson(1982)、McAdamsら(1992)などを参考としつつ、ジェネラティビティを多面

的に測定することができるように項目が選定されている。そこで、本研究のジェネラティビティ尺度については、串崎(2005)により提唱された25項目を採用した。不安感について、2つの設問を設けた。1つ目は、「自分の将来に不安を感じている」(以下省略して、「自己不安」と呼ぶ)という設問であり、2つ目は、「次の世代が生きる社会を考えたとき、不安を感じている。」(以下省略して、「次世代不安」と呼ぶ)という設問である。これらジェネラティビティ尺度と不安感尺度については、「1. あてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらでもない」「4. ややあてはまる」「5. あてはまる」という5段階の評定を求めた。

### 3. ジェネラティビティを構成する因子についての考察

McAdams & Aubin(1992)は、ジェネラティビティを、「他者への世話と責任」、「知識・スキルの伝達」、「隣人・社会への貢献」、「記憶に残る功績」、「創造性・生産性」の5つの側面から考えた。また、丸島(2005, 2007)は、ジェネラティビティ尺度の開発にあたり、「世話(offering)」、「創造性(creativity)」、「世代性(maintaining)」というジェネラティビティの3つの側面を考慮した。串崎(2005)のジェネラティビティ尺度においては、「生み出し育てることへの関心」、「世代継承的感觉」、「自己成長・充実感」、「脱自己本位的態度」の4因子構造とされているが、本研究において、この尺度項目を用いて因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った結果、スクリーンプロットと因子の解釈の可能性を考慮したところ5因子構造と考えられた。第1因子は子供や若者の成長を助けることに関する項目において因子負荷量が高く「育てることへの関心」とした。第2因子は自分自身の成長に関する項目において因子負荷量が高く「自己成長・充実感」とした。第3因子は自分自身の独創性や個性を発揮することに関する項目にお

いて因子負荷量が高く「クリエイティビティへの渴望」とした。第4因子は子供や部下を自分の思い通りにしたいという思いから脱却したいという項目において因子負荷量が高く「脱自己本位的態度」とした。第5因子は子供や若者に自分の知識や技術・経験を継承し、さらに発展させたいという項目において因子負荷量が高く「世代継承的感觉」とした。

表1は最終的な因子分析の結果のパターン行列を示したものである。この表をみると、22番と16番の設問についての共通性が、ともに0.3以下となっており低めではあるが、この2つの項目を除外して因子分析をやり直しても改善がみられないこと、5つの因子の信頼度が、すべて0.6以上であることから、内的整合性が確保されていると判断し、有効とした。また、表2は、串崎(2005)が実施した同じ25項目の設問により実施したアンケート調査にもとづく因子分析結果と、我々の因子分析結果との比較である。我々の結果では、串崎の「生み出し育てることへの関心」という因子から、生み出すことに関する項目が明らかな形として独立して第3因子を形成しているようにみえる。そこで、生み出すこと育てることを明確にわけるために、我々は、第1因子を「育てることへの関心」、第3因子を「クリエイティビティへの渴望」と呼ぶことにした。上記のMcAdams & Aubin(1992)や丸島(2005, 2007)で考慮された因子である創造性の側面が、本研究でも明確にあらわれているといえる。「世代性」という観点は丸島(2005, 2007)にもあらわれているが、McAdams & Aubin(1992)では明確には現れていない。我々の分析の結果から得られた第5因子を「世代継承的感觉」と呼ぶことにする。この呼び方は、串崎の第3因子に使われたものであるが、設問内容を見ると、我々の第5因子の方が、より明確な「世代継承的感觉」を示していると思われる。2005年当時には明確な形で現れてきていなかった世代継

表1. ジェネラティビティ尺度の因子分析結果 (Promax回転後)

項目番号	項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性	信頼度 $\alpha$
		生み出し育てることへの関心	自己成長・充実感	クリエイティビティへの渴望	脱自己本位的態度	世代継承的感覚		
14	未来の社会や子供たちのために役立つことをしたい	0.747	-0.159	0.025	0.073	0.103	0.581	0.803
4	次の世代のために何が出来るか考える	0.646	0.022	0.161	-0.173	-0.111	0.577	
1	他の人の成長を手助けしたい	0.584	0.014	0.11	-0.153	-0.092	0.439	
7	子供は先祖から授かった命を子孫につなげてくれるものだと思う	0.571	-0.132	-0.142	0.039	0.126	0.282	
20	大人として社会に貢献する責任を感じている	0.557	-0.016	0.056	-0.023	0.19	0.516	
9	若い人たちがどう生きていこうが、私には関係がない*	0.552	0.231	-0.069	0.053	-0.086	0.361	
10	子供は社会からの預かりものであると思う	0.53	-0.221	0.047	0.204	0.115	0.297	
5	見返りがなければ、人のために骨を折りたくない*	0.511	0.189	-0.067	0.231	-0.065	0.339	
22	縁の下の力持ちにはなりたくない*	0.481	0.089	-0.276	0.113	-0.038	0.213	
12	大人としてなすべきことを果たしていないような後ろめたさを感じる*	-0.168	0.693	-0.003	0.05	-0.07	0.449	
8	若い頃から成長していない気がする*	-0.02	0.692	0.111	0.044	-0.012	0.5	
17	世の中のためになるようなことはほとんどしていない*	0.016	0.623	0.18	-0.026	0.064	0.496	
21	誰も私のことを必要としていないように感じる*	0.211	0.589	-0.009	0.041	-0.023	0.467	
3	今の自分に物足りなさを感じている*	-0.21	0.532	-0.155	0.207	0.137	0.382	
15	本来の能力を発揮できていない気がする*	-0.093	0.423	-0.421	-0.019	0.035	0.315	
23	独創的な仕事や活動がしたい	-0.205	0.026	0.872	0.126	0.064	0.555	0.773
11	私にしかできないような個性的な仕事や活動をしたい	-0.02	-0.052	0.825	0.134	0.038	0.579	
6	新しい考えや計画、作品などを生み出そうと努力している	0.107	0.128	0.67	-0.054	-0.108	0.534	
2	子供や部下を自分の思い通りに動かしたい*	0.035	0.025	0.138	0.76	-0.021	0.492	0.631
25	子供や部下がいうこときかないと恩知らずだと感じる*	0.219	0.119	0.023	0.551	-0.057	0.358	
16	自分のやり方を人に押し付けることがある*	0.001	0.148	0.078	0.513	0.032	0.257	0.799
19	引退した後も自分がやってきたことを誰かに引き継いでほしい	0.029	0.026	-0.026	-0.057	0.813	0.722	
13	自分のやってきたことを引き継いで発展させてくれる人がいたら嬉しい	0.172	-0.068	0.07	0.077	0.656	0.571	
18	若い人に自分の知識や技術・経験などを伝えている	0.136	0.273	0.093	-0.201	0.299	0.469	
24	自分より若い人のモデルになるよう心がけている	0.175	0.145	0.174	-0.215	0.224	0.439	

(因子抽出法: 最尤法、回転法: プロマックス回転。\*印は逆転項目を表す。)

承的感覚が、それから15年経った現在、新しい方向として出現していると解釈してよいであろう。これには、2011年東北大地震に代表される多くの自然災害により、たびたび強く感じさせられた人生のはかなさの感覚から、近年新たに生じたも

のかもしれない。また、串崎の「脱自己本位的態度」因子の中で、自分と社会のつながりに関係する設問は、われわれの結果では、第1因子に吸収され、残った3つの設問で、われわれの第4因子が形成されている。この第4因子を構成する設問

表2. 串崎(2005)の因子分析の結果との比較

本研究で抽出された因子			串崎(2005)で抽出された因子	
因子	項目No	設問	項目No	因子
育てることへの関心	14	未来の社会や子供たちのために役立つことをしたい	6	生み出し 育てることへの関心
	4	次の世代のために何ができるか考える	11	
	1	他の人の成長を手助けしたい	1	
	7	子供は先祖から授かった命を子孫につなげてくれるものだと思う	20	
	20	大人として社会に貢献する責任を感じている	14	
	9	若い人たちがどう生きていこうか、私には関係がない	4	
	10	子供は社会からの預かりものであると思う	23	
	5	見返りがなければ、人のために骨を折りたくない	24	
自己成長・充実感	22	縁の下の力持ちにはなりたくない	3	自己成長・充実感
	12	大人としてなすべきことを果たしていないような後ろめたさを感じる	21	
	8	若い頃から成長していない気がする	12	
	17	世の中のためになるようなことはほとんどしていない	8	
	21	誰も私のことを必要としていないように感じる	15	
	3	今の自分に物足りなさを感じている	17	
クリエイティビティへの渴望	15	本来の能力を発揮できていない気がする	18	脱自己本位的態度
	23	独創的な仕事や活動がしたい	2	
	11	私にしかできないような個性的な仕事や活動をしたい	5	
脱自己本位的態度	6	新しい考えや計画、作品などを生み出そうと努力している	16	脱自己本位的態度
	2	子供や部下を自分の思い通りに動かしたい	22	
	25	子供や部下がいうこときかないと恩知らずだと感じる	9	
世代継承的感覚	16	自分のやり方を人に押し付けることがある	25	世代継承的感覚
	19	引退した後も自分がやってきたことを誰かに引き継いでほしい	13	
	13	自分のやってきたことを引き継いで発展させてくれる人がいたら嬉しい	19	
	18	若い人に自分の知識や技術・経験などを伝えている	7	
	24	自分より若い人のモデルになるよう心がけている	10	

表3. 尺度ごとの基本統計量

尺度名	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
育てることへの関心	1037	1.22	5	3.31	0.60
自己成長・充実感	1037	1	5	3.03	0.71
クリエイティビティへの渴望	1037	1	5	2.93	0.89
脱自己本位的態度	1037	1	5	3.58	0.79
世代継承的感覚	1037	1	5	2.76	0.83
ジェネラティビティ	1037	1.48	4.72	3.14	0.47
自己不安	1037	1	5	3.43	1.18
次世代不安	1037	1	5	3.42	1.08

表4. 性別毎の次世代不安とジェネラティビティ下位尺度の相関

性別	ジェネラティビティ下位尺度				
	育てることへの関心	自己成長・充実感	クリエイティビティへの渴望	脱自己本位的態度	世代継承的感觉
男性	.152**	-.157**	.013	-.090*	.125**
女性	.194**	.004	.007	.001	-.016

(\*は5%有意を表し、\*\*は1%有意を表す)

は、より自分のエゴに関するものに集中していると思われるので、この因子を「脱自己本位的態度」と呼ぶことにした。これらの下位尺度ごとに、記述統計量を計算すると表3のようになった。ここで、ジェネラティビティという項目は、ジェネラティビティに関する25個の質問に対する回答値の平均を取ったものである。

#### 4. 不安感とジェネラティビティ意識に関する男女別分析

ジェネラティビティ尺度と不安感尺度の相関を調べると、まず、ジェネラティビティと自己不安の間には、1%水準で有意な負の相関がみられた( $r=-.374, p<.001$ )つぎに、ジェネラティビティと次世代不安の相関を調べると、5%水準で有意な相関がみられた( $r=.075, p=.016$ )。

ジェネラティビティ尺度と2つの不安感尺度の相関を男女別にみると、男性の場合、ジェネラティビティと自己不安の間に、負の相関がみられ( $r=-.355, p<.001$ )、ジェネラティビティと次世代不安の間には、有意な相関はみられなかった。女性の場合には、ジェネラティビティと自己不安の間には1%水準で有意な負の相関が見られ( $r=-.392, p<.001$ )、ジェネラティビティと次世代不安の間に5%水準の有意な相関がみられた( $r=.102, p=.020$ )。男女とも自己不安が強いほどジェネラティビティ意識が低いことが分かった。これは、自分自身の問題にフォーカスが向いている段階であることを示している。一方で、次世代

不安とジェネラティビティ意識に関しては、女性のみ相関が見られた。この違いについてさらに分析するために、下位尺度毎の相関を調べた結果が表4である。男性は、育てることへの関心と世代間継承については1%水準で有意な正の相関が見られたが、自己成長・充実感については1%水準で有意な負の相関が見られ、脱自己本位的態度については、5%水準で有意な負の相関が見られた。女性は育てることへの関心についてのみ1%水準で有意な正の相関が見られ、その他の項目には有意な相関はみられなかった。

#### 5. 年齢区分別の分析

このセクションでは、ジェネラティビティ尺度と2つの不安感尺度の相関を5歳きざみの年齢区分毎にみてみよう。表5からは、自己不安の方が、ジェネラティビティとの相関がある年齢区分が多いことがわかる。

図2は男性のジェネラティビティと自己と次世代に対する不安感について、年齢区分別に平均得点の推移を示したものである。図1は、同様に女性のジェネラティビティと自己と次世代に対する不安感について示したものである。図1と図2を比較すると、30~39歳の女性に強い自己不安感が見られる。また、男性では50~54歳、女性では45~49歳の時に、自己不安、次世代不安ともにピークが見られた。ジェネラティビティについては、男性では年齢が上がるにつれ上昇する傾向があるのに対して、女性では年齢にあまり関係なく横ば

表5. 年齢区分別の相関係数

年齢区分	ジェネラティビティと自己不安		ジェネラティビティと次世代不安	
	相関係数	p値	相関係数	p値
35～39歳	-.179	.055	.124	.184
40～44歳	<b>-.340**</b>	<.001	<b>.216*</b>	.020
45～49歳	-.267*	.004	.110	.239
50～54歳	-.127	.176	<b>.282**</b>	.002
55～59歳	<b>-.381**</b>	<.001	.091	.332
60～64歳	<b>-.364**</b>	<.001	-.164	.081
65～69歳	<b>-.516**</b>	<.001	<b>-.223*</b>	.017
70～74歳	<b>-.390**</b>	<.001	.082	.387
75歳～	<b>-.279*</b>	.003	.063	.505

(\*は5%有意を表し、\*\*は1%有意を表す)

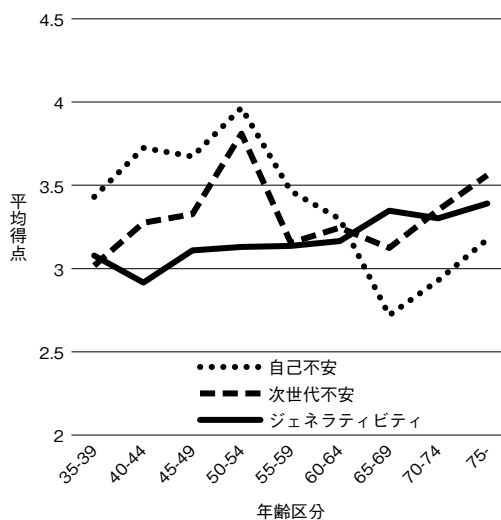


図1. 男性のジェネラティビティと不安感の年齢区分別推移

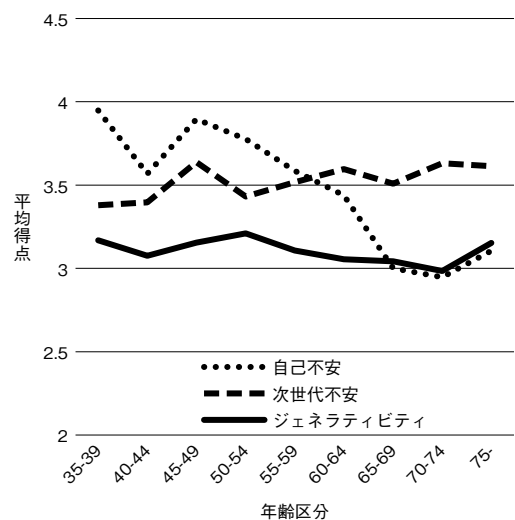


図2. 女性のジェネラティビティと不安感の年齢区分別推移

い状況であるように見える。

では、ジェネラティビティ意識は年齢によってどのように変化するのか下位尺度の変化を用いてみてみよう。図3、図4は男女の年齢別ジェネラティビティ意識の下位尺度の変化を示したものである。男性はすべての下位尺度が上昇傾向にあるのに対して、女性は「クリエイティビティへの渴望」と「世代継承的態度」は横ばいであるが、「育て

ることへの関心」、「脱自己本位的態度」、「自己成長・充実感」はすべての年齢においておおむね上昇傾向にある。特に、この3つの下位尺度において、男性は、60～64歳と70～74歳の10年で、顕著な上昇が見られる。この時期をジェネラティビティ意識に目覚める黄金の10年といっているであろう。

図1、図2において、男女ともに共通している

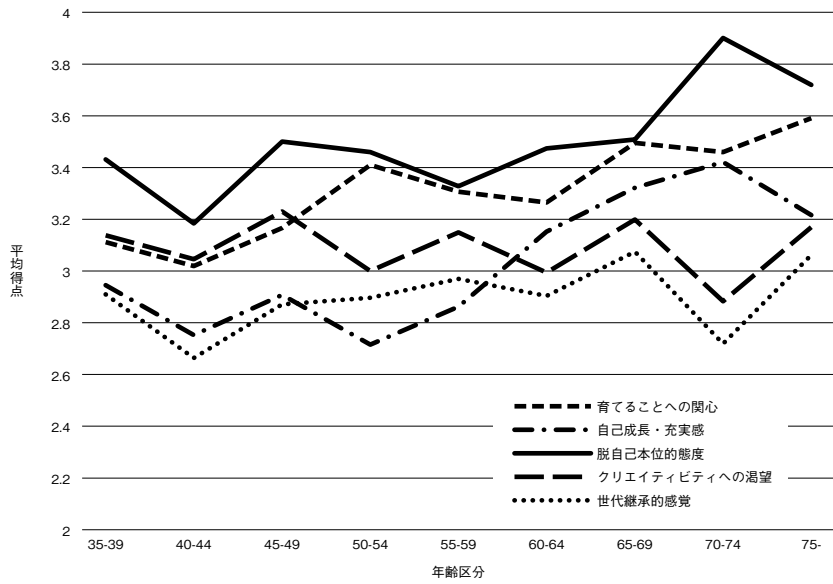


図3. 男性のジェネラティビティ下位尺度の年齢区分別推移

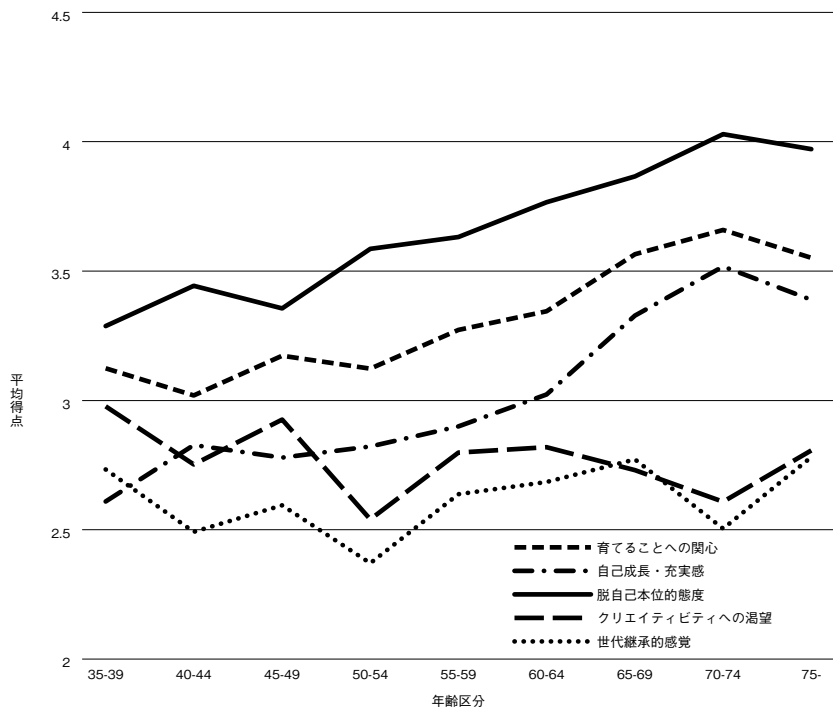


図4. 女性のジェネラティビティ下位尺度の年齢区分別推移



表6. 男性の不安感の年齢区分別平均

年齢区分	自己不安の平均得点	次世代不安の平均得点	t 値	自由度	有意確率	ゾーン
35-39	<b>3.431</b>	3.017	2.070	57	.043*	1
40-44	<b>3.724</b>	3.276	2.350	57	.022*	
45-49	<b>3.672</b>	3.328	2.202	57	.032*	
50-54	3.966	3.810	1.197	57	.236	2
55-59	3.466	3.155	1.817	57	.074	
60-64	3.298	3.246	0.353	56	.725	
65-69	2.719	<b>3.123</b>	-2.692	56	.009*	3
70-74	2.930	<b>3.351</b>	-2.191	56	.033*	
75-	3.175	<b>3.561</b>	-2.012	56	.049*	

(\*は有意水準5%)

表7. 女性の不安感の年齢区分別平均

年齢区分	自己不安の平均得点	次世代不安の平均得点	t 値	自由度	有意確率	ゾーン
35-39	<b>3.948</b>	3.379	3.444	57	.001*	1
40-44	3.569	3.397	0.936	57	.353	2
45-49	3.897	3.638	1.789	57	.079	
50-54	3.776	3.431	1.916	57	.060	
55-59	3.586	3.517	0.354	57	.725	3
60-64	3.439	3.596	-0.953	56	.345	
65-69	3.000	<b>3.509</b>	-3.026	56	.004*	
70-74	2.947	<b>3.632</b>	-4.210	56	<.001*	3
75-	3.105	<b>3.614</b>	-2.871	56	.006*	

(\*は有意水準5%)

のは、若い頃は自己不安が次世代不安より高いが、あるポイントから、次世代不安の方が自己不安よりも高くなっていることである。このポイントが、自分自身に向かっていたフォーカスが他者に向き始める重要な意味を持つポイントと位置付けることができるであろう。このポイントにおける逆転現象がジェネラティビティとどのような関係があるのかを次のセクションで分析する。

## 6. ゾーン分析

男女それぞれについて、年齢区分毎に自己不安と次世代不安に有意な差があるかどうか調べるた

めに、帰無仮説を「自己不安と次世代不安に差はない」としてt検定を行った。表6、表7は、その結果を示したものである。

その結果、男性の場合は35～49歳においては自己不安が次世代不安よりも有意に高く、65歳以上においてはその大小関係が逆転している。そして、その中間の50～64歳においては、有意な差が見られなかった。女性の場合は、35～39歳において自己不安が次世代不安よりも有意に高く、65歳以上で逆転現象が見られた。その中間の40～64歳においては有意な差は見られなかった。

年齢別で分析を行った結果、男性の場合も、女

表8. 男女別各ゾーンの年齢範囲と度数と度数

性別		ゾーン	ゾーン1	ゾーン2	ゾーン3
男性	年齢範囲		35~49歳	50~64歳	65歳~
	度数		174	173	171
女性	年齢範囲		35~39歳	40~64歳	65歳~
	度数		58	289	171

性の場合も、それぞれ自己不安が次世代不安よりも高い時期、自己不安と次世代不安に差が見られない時期、次世代不安が自己不安より高い時期の3つの時期の存在が見られた。この3つの時期を若い順からゾーン1、ゾーン2、ゾーン3と呼ぶこととする。表8は、各ゾーンの年齢範囲と度数を示したものである。女性の場合、ゾーン2の年齢範囲が男性よりも広がっている。

さて、自己不安と次世代不安の状況から導き出した3つのゾーンに分けてジェネラティビティ意識について分散分析を行った結果、男性の場合のみ、5%水準で有意な差があることがわかった( $F(2, 515)=20.562(p<.001)$ )。Tukey HSDを用いた多重比較により、男性のジェネラティビティ意識は、5%有意水準でゾーン1よりもゾーン3の方が有意に高く、ゾーン2よりゾーン3の方が有意に高いことが分かった。一方で、女性の場合には、ゾーンによってジェネラティビティ意識に有意な差はみられなかった。

ここからは、ジェネラティビティ意識の5つの下位尺度について、ゾーン分析をおこなっていく。ジェネラティビティの5つの下位尺度についてゾーンによる違いがあるかを調べるために男女別に分散分析を行った結果、男女とも「育てることへの関心」、「自己成長・充実感」、「脱自己本位的態度」について1%水準で有意な差が見られた。「育てることへの関心」について、男性は $F(2, 515)=21.927(p<.001)$ 、女性は $F(2, 515)=32.825(p<.001)$ である。「自己成長・充実感」に

ついて、男性は $F(2, 515)=23.251(p<.001)$ 、女性は $F(2, 515)=48.745(p<.001)$ である。「脱自己本位的態度」について、男性は $F(2, 515)=9.876(p<.001)$ 、女性は $F(2, 515)=22.050(p<.001)$ である。Tukey HSDによる多重比較を行った結果を表9に示す。表9の◎印は、ゾーン1とゾーン2、ゾーン2とゾーン3、ゾーン1とゾーン3のすべての組み合わせにおいて5%水準で有意な差が見られたことを示しており、○印は、ゾーン1とゾーン3、ゾーン2とゾーン3の組み合わせにおいて5%水準で有意な差が見られたことを示している。

男性においては、育てることへの関心がゾーン1からゾーン2、ゾーン3へと年齢を重ねるごとに有意に増加している。女性の場合はゾーン1とゾーン3、ゾーン2とゾーン3においては有意に増加しているといえるが、ゾーン1とゾーン2の間に有意な差はみられない。これは、ここでの育てることへの関心の多くが自らの子供を意味しておりゾーン1、2では差が見られないのではないだろうか。子育てが一段落した段階であるゾーン3では、ゾーン1、2とは異なる意味での次世代を育てるという意識への変容が、ゾーン1とゾーン3、ゾーン2とゾーン3での変化として表れている可能性が考えられる。

一方で、自己成長・充実感と脱自己本位的態度については、男性の場合は、ゾーン1とゾーン3、ゾーン2とゾーン3においては有意に増加しているといえるが、ゾーン1とゾーン2の間に有

意な差はみられない。女性の場合は、ゾーン1からゾーン2、ゾーン3へと年齢を重ねるごとに有意に増加している。女性は、年齢を経ることで自己成長や・充足感を求めるようになり、脱自己本位的態度を獲得していくが、男性は社会とのかかわりの中で、それらを獲得する機会が多く存在し、ゾーン1、2の間で差が見られないのであろう。いずれにしても、男女ともに、ゾーン3に移行する段階で自己成長・充足感と脱自己本位的態度の意識の変化を経験していると考えられる。

これらの結果から、育てることへの関心、自己成長・充実感、脱自己本位的態度が不安感の状況と深くかかわっているということがわかる。特に、ゾーン2からゾーン3へ移り自己不安から次世代不安へ目が向きだすと同時に、自己本位的態度から脱却し、育てることへの関心が高まり、自己成長・充実感を味わうことができるといえるであろう。ゾーン3において、自分の成長とともに、他への関心が強まるのである。これは、ジェネラティビティが老年期にかけても発達するという串崎(2005)の主張に合致する結果である。

ゾーン2はゾーン1の状態からゾーン3への移行期だと考えることができるであろう。女性の方がゾーン2の幅が広いのは、男性よりも女性の方が労働を含む社会的活動の多様性が大きいからではないだろうか。

男女ともにゾーン2のどこかのポイントで、エゴから解放され次世代を育てることに目が向くのである。新たな自己成長を遂げるそのポイントを『めざめポイント』と呼んでもよいかもしれない。

## 7. おわりに

本研究では、ジェネラティビティを構成する下位尺度として「育てることへの関心」、「自己成長・充実感」、「クリエイティビティへの渴望」、「脱自己本位的態度」、「世代継承的感觉」の5つを因子分析により求めた。そのうち、「育てることへの関心」、「自己成長・充実感」、「脱自己本位的態度」の3つの下位尺度による評価がその人の自己不安と次世代に対する不安感と強く関係していることがわかった。男女ともに65歳以上の年齢になると、自分自身よりも次世代に対する意識が強まり、エゴを脱し、ゆとりをもって社会を俯瞰する心境に到達するように思える。特に男性においては「育てることへの関心」、「自己成長・充実感」、「脱自己本位的態度」の3つの下位尺度が急速に上昇する65歳からの黄金の10年を如何に過ごすかが重要であると思われる。一方で、「クリエイティビティへの渴望」、「世代継承的感觉」については、年齢による有意な差はみられなかった。この2つの下位尺度については、男性よりも女性の方が低い評価点である。ジェネラティビティの世代別の推移を見た時、男性は年齢とともにジェネラティビティ意識が高まるのに対して、女性は横ばいでほとんど変化が見られない。女性の内面から発せられるクリエイティビティの渴望の声にどう耳を澄ますことができるか、そして、社会における年配から若者への縦のつながりをどう作っていくかが、女性のジェネラティビティ意識の向上における今後の課題となってくると思われる。

表9. ゾーン毎で有意な差が見られた下位尺度

	男性	女性
育てることへの関心	◎	○
自己成長・充実感	○	◎
脱自己本位的態度	○	◎

## 参考文献

- Doda (2022)「平均年収ランキング」、2020年12月7日アクセス、<https://doda.jp/guide/heikin/age/>。  
 英語学習ひろば(2022)「1,399万円足りない？老後の資産事情」、2021年5月27日アクセス、<https://hitononayami.com/old-age-funds-survey/>。  
 Erikson, E.H. (1950) *Childhood and society*. New York : Norton &

- Company, (仁科弥生[訳]1977 幼児期と社会 I、みすず書房).
- Erikson, E.H.(1982) The life cycle completed. New York : Norton & Company, (村瀬孝雄・近藤邦夫[訳]1989 ライフサイクル—その完結—みすず書房).
- ジュンコ・グッドイヤー(2019) ジェネラティビティと子供の未来—すべての子供が輝く場所を、ファイナンス、55(8)、p.1.
- 串崎幸代(2005) EH Erikson のジェネラティビティに関する基礎的研究—多面的なジェネラティビティ尺度の開発を通して、心理臨床学研究 23(2)、pp.197-208.
- McAdams, D.P., de St. Aubin E. (1992) A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts and narrative themes in autobiography, Journal of Personality and Social Psychology, 62(6), pp.1003-1015.
- McAdams, D. P., de St. Aubin, E., & Logan, R. L. (1993) Generativity among young, midlife, and older adults. Psychology and Aging, 8(2), pp.221-230.
- 丸島令子(2005) 世代性尺度の作成、世代性の関心と行動モデルの測定、心理臨床学研究、23(4)、pp.422-433.
- 丸島令子(2007) 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討、心理学研究、78(3)、pp.303-309.
- 岡本祐子、上手由香、高野恵代編著(2018) 「世代継承性研究の展望 アイデンティティから世代継承性へ」、ナカニシヤ出版.
- 小澤義雄(2013) 老年期における世代間継承の認識を伴う自己物語の構造、発達心理学研究、24(2)、pp.183-192.
- Schoklitsch A. & Baumann U. (2012) Generativity and aging: A promising future research topic?, Journal of Aging Studies, 26(3), pp.262-272.
- Stewart, A. J., & Vandewater, E. A. (1998) The course of generativity. In D. P. McAdams & E. de St. Aubin (Eds.), Generativity and adult development: How and why we care for the next generation, Washington D.C.: American Psychological Association, pp.75-100.
- 田淵恵(2009) 中高年者による若年世代支援プログラムにおける関心とその年齢差：世代間交流とジェネラティビティの視点から、生老病死の行動科学、14、pp.3-12.
- 高橋彩(2020) ジェネラティビティと心理的居場所感が職業的アイデンティティに及ぼす影響：ジェネラティビティを媒介要因としたプロセスモデルの検証、産業・組織心理学研究 第33巻、第2号、pp.93-104.
- Yamada, Y. (2004) The generative life cycle model : Integration of Japanese folk images and generativity. In E. de St. Aubin, D.P.McAdams, & T.C.Kim(Eds.), The generative society : Caring for future generations, Washington, DC: American Psychological Association, pp.99-112.